

ケアセンターけやき

症 例 概 要 利用者 : 60代 女性

病 名 : 脊髄小脳変性症(難病)、頸髄症、頸椎脊柱管狭窄症、神経因性膀胱、右大腿骨頸部骨折術後

経 過 :

病前は夫と二人暮らしで、お花屋での仕事を生きがいにされてきました。2016年脊髄小脳変性症の診断。頸髄症、頸椎脊柱管狭窄症、神経因性膀胱、右大腿骨頸部骨折術後の影響もあり、徐々に日常生活活動(ADL)に支障が出るようになる。ADLが徐々に低下してくなかで、今後の生活に対するご希望を伺い、その希望に向けて取り組める機会を得ることができた為、報告させていただきます。

内 容

2013頃年に手のふるえが発生。2015年には歩行障害出現、頸髄症の診断で前方固定術施行。転倒回数は減少するも、歩行障害は改善されず、2016年大学病院で精密検査を行った結果、脊髄小脳変性症(難病)の診断。

2017年呼吸状態悪化のため、気管切開術施行。2018年嚥下状態悪化のため、胃瘻造設術施行。

けやき訪問看護ステーションでは、他訪問看護ステーションからのリハビリ希望による引き継ぎであったため、状況把握と課題を他事業所と連携を取りながら開始。介入時のADLはベッド上の生活で、ほぼ全介助レベル。

介入当初、誤嚥のリスクが常にあり、変化の状況に合わせた環境調整、適切な動作パターン、コミュニケーションツールの作成、介護・介助方法のアドバイス等を他事業所・けやき看護師・療法士で実施。

難病によるADL低下に伴い、今後の希望を伺うと、「もう一度、食べたい、外出して、お花を見たい。」と言うことが聞かれました。このことをきっかけに、ケアマネジャーを通じて、他事業所にも働きかけてもらい、「少しでも自分の口から食べること、車いすで外出して、お花を見に行く」ことを目標に設定して準備に入りました。

経口摂取に関しては、大学病院摂食嚥下リハビリチームと連携して行いました。外出に関しては、自宅車両を福祉整備に出して乗り降りを容易にし、車や車いすへの移乗方法、外出時の緊急時対応等の調整を行いました。その結果、ご本人の希望をかなえることができました。

難病を抱えながらも、ご本人らしく「輝きのある1日」を大切に生きていられる姿はキラキラ介護賞に値するとし、推薦させていただきます。